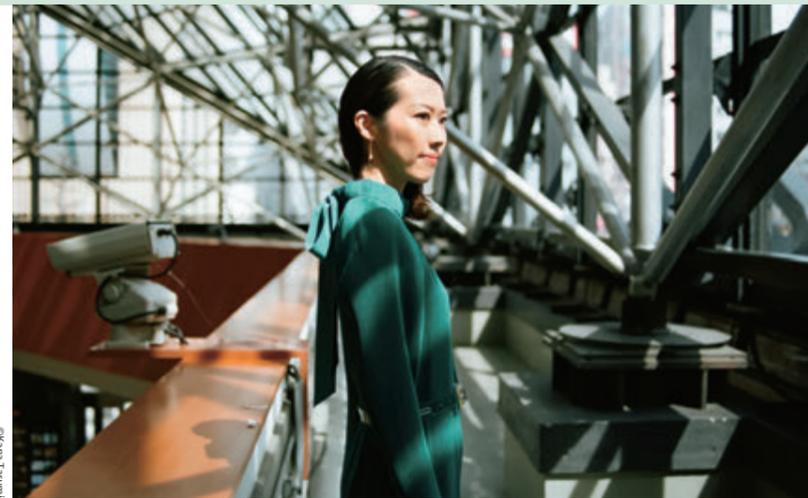




# TOKYO JAZZ 2022 NEO-SYMPHONIC ! CINEMA JAZZ

プロデュース・指揮：挾間美帆

TOKYO JAZZ 2022 NEO-SYMPHONIC! CINEMA JAZZ



SHUNPEI TERADA

## 挾間美帆が日本のジャズシーンの 精鋭と奏でる映画音楽

日本を代表するジャズフェスTOKYO JAZZの久々のライブ開催は、  
挾間美帆が監修する東京芸術劇場の人気企画NEO-SYMPHONIC JAZZとの  
コラボレーションによるスペシャルプログラムだ。

ジャズ作曲家の挾間美帆が芸劇とコラボするのは今年で4回目。その挾間に、今回のプログラムの企画動機や抱負を聞いた。

「今回は、TOKYO JAZZというフェスならではのお祭り感を出したいと思いました。TOKYO JAZZはこの2年間、ほぼ海外のゲストが呼べない中で日本のジャズ・ミュージシャン中心にオンラインでやってきた。それは日本のシーンが確立されてきたからできたこと。だから、今回は私も日本のシーンの人たちと一緒にやりたいと思いました」

前回はモノクールの吉田沙良をフィーチャーしたが、今回はその流れを汲みつつ、さらに拡張したと言えるだろうか。黒田卓也、石若駿、須川崇志、そして、WONKの江崎文武、更には映画『竜とそばかすの姫』で歌姫Belleを演じた歌手の中村佳穂までもがこのプロジェクトに加わる。

その豪華な編成で行われる今年のテーマは「CINEMA JAZZ」！つまり「映画とジャズ」だ。「スピルバーグが『ウエスト・サイド・ストーリー』をリメイクしたり、ジョン・パティステが

手掛けた『ソウルフル・ワールド』があったり、この1、2年でジャズにまつわる作品が話題になりました。テレンス・ブランチャードがMETのオペラの音楽を書いたこともありました。今回の企画はその3人の作品をやりたいと思ったところから始めました」

他には挾間がジャズ作曲家によるオーケストレーションに魅了されるきっかけになったというヴィンス・メンドーサのペンによるビョーク『ダンサー・イン・ザ・ダーク』や、挾間自身も参加した鷺巣詩郎による『エヴァンゲリオン』のサントラが候補に挙がっている。テレンスに関してはスパイク・リー映画からの楽曲を選ぶことで、著名な映画から選曲しているのが今回の特徴だ。ちなみに江崎、石若、中村、挾間は『竜とそばかすの姫』に関わっている。映画がテーマの企画に、ひとつの映画での繋がりのあるミュージシャンが集まっているのも筋通っているようで美しい。

そのメンバーが東京フィルハーモニー交響楽団とともに、ピラミッドの頂点にある崇高なバースタイン、歌に特化した楽曲のジョン・パティステ、ミュージシャンズ・ミュージシャン的なテレンス・ブランチャード、膨大なレイヤーがスコアから聴こえてくるヴィンス・メンドーサ、さらに『エヴァンゲリオン』のスコアなどを演奏する予定だ。

「海外で輝いている映画音楽を、今の日本のシーンで輝いているミュージシャンが自分たちのセンスに置き換えて演奏してくれることに期待しています。ファッションでも東京ブランドがありますけど、ジャズでも自分たちのシーンを確立した“東京のジャズ・ブランド”ができつつあります。彼らのセンスに今回取り上げる映画音楽がハマったら面白くなると思います」

文：柳楽光隆（ジャズ評論家）



2022年8月19日(金) 19時開演 コンサートホール 詳細はP9へ

プロデュース・指揮：挾間美帆

演奏：東京フィルハーモニー交響楽団

featuring 黒田卓也(Tp)、江崎文武(Pf)、須川崇志(Ba)、石若駿(Dr)  
with special guest 中村佳穂(Vo) ※コンサート全編にわたっての出演ではありません  
曲目：バースタイン『ウエスト・サイド・ストーリー』より「シンフォニック・ダンス」  
ジョン・パティステ『ソウルフル・ワールド』より 岩崎太整『竜とそばかすの姫』より  
鷺巣詩郎『エヴァンゲリオン』シリーズより ビョーク『ダンサー・イン・ザ・ダーク』より  
テレンス・ブランチャード『ミュージック・フォー・フィルム』より ほか

特設WEBサイト <https://www.tokyo-jazz.com/>

NEO TOKYO JAZZ 2022  
SYMPHONIC CINEMA JAZZ

東京芸術劇場 海外オーケストラシリーズ

## サー・サイモン・ラトル指揮 ロンドン交響楽団

Sir Simon Rattle & London Symphony Orchestra



©Mark Allan

## 世界トップ級の名コラボを聴く最後の機会

海外のオーケストラを日常的に聴けない状況が2年以上続いている。それゆえ、サイモン・ラトル指揮/ロンドン交響楽団の来日のニュースは、この上ない喜びを与えてくれる。

英国生まれのラトルは、地元のバーミンガム市交響楽団を一流に育て上げ、2002～18年には世界に冠たるベルリン・フィルの芸術監督を務めた現代を代表するマエストロ。明晰かつ躍動的な音楽作りで、作品に唯一無二の生気を与える名指揮者だ。ロンドン響は1904年に創設された英国最高のオーケストラ。厚みのある弦楽器陣と“プラス王国”の名手が集う管楽器陣が融合した、世界屈指の機能性と柔軟性を誇る名楽団である。

ラトルは2017年に同楽団の音楽監督に就任し、目覚ましい活動を行ってきた。中でも2018年の同コンビ初の来日公演では、ベルリン・フィルの重責から解放されたラトルが、心から楽しみながら音楽を紡ぎ、ロンドン響も自国の名匠をシェフに得た喜び漲る演奏を展開。その精彩に富んだコラボは、聴く者にオーケストラ音楽の醍醐味を満喫させた。

それだけに2020年の日本公演(芸劇公演を含む)の中止は痛恨の極みだった。だが今秋、待望の来日が実現する。しかも昨年、ラトルが2023年秋からバイエルン放送響に移ること(首席指揮者への就任)が発表された。ならばコンビ最後の来日の可能性大なる本公演は絶対に聴き逃せない。

プログラムも実に興味深い。メインはブルックナーの交響曲第7番。オーストリアの交響曲の大家随一の成功作にして、旋律的な親しみやすさと壮大な響きが共生した傑作であり、芸劇の音響空間に相応しい作品でもある。特に今回使用されるコールス校訂版は、ラトルがベルリン・フィルで初演し、日本公演でも披露した18番のひとつだ。

前半はフランスの作品が披露される。幕開けのベルリオズの序曲『海賊』は、澁刺とした曲調がラトルの持ち味にピッタリだし、次のドビュッシーのレア曲『リア王』は、ラトルがバーミンガム市響と録音している掌中の作品。両曲は実演自体が貴重でもある。さらに“管弦楽の魔術師”ラヴェルが腕を振った「ラ・ヴァルス」は鮮烈の極み。フランス物とブルックナーの組み合わせは稀なので、相乗効果による新発見もありそう。

これは首都圏では芸劇だけのオリジナル・プログラム。それだけでも聴く価値がある。

海外の一流オーケストラは、伝統や土地の空気感が相まった、日本の楽団とは異なる質感を有しており、その生演奏に触れるのは得難い体験となる。しかも今回は、世界トップ級のこの名コラボを芸劇で味わう(おそらく)最初で最後の機会。一期一会の感銘を得るべく、必ずや足を運びたい。

文：柴田克彦（音楽評論家）

©Mark Allan



2022年10月7日(金) コンサートホール 詳細はHPへ

出演：サー・サイモン・ラトル(指揮)

ロンドン交響楽団(管弦楽)

曲目：ベルリオズ/序曲『海賊』作品21

ドビュッシー/劇音楽『リア王』から「ファンファーレ」、「リア王の眠り」

ラヴェル/ラ・ヴァルス

ブルックナー/交響曲第7番 ホルン調 WAB107

<https://www.geigeki.jp/performance/concert251>